

〔 論文要旨 〕

唐代女性詩人の詩と文学

— 上官昭容（婉兒）、李冶、薛濤、及び魚玄機の詩作から —

横田 むつみ

唐代の女訓書『女論語』には、「歌詞を^{ほしいまま}縦にする莫かれ、他の淫語を恐るればなり」と女性が詩歌に親しむことを禁ずるような教えがあった。また、政治の担い手であった士大夫層が文学の担い手でもあったことから、宮廷の後妃等の一部の女性と著名な文人の妹や娘等の名媛と称された女性を例外として、女性が公然と詩を詠むことはなかった。そのような時代に女性が詩を詠むという扉を開いたのは誰であったのか。それは中唐以降に現れた妓女や女道士の詩人であった。

本論文では、この妓女や女道士は詩作をどのようにして習得していったのか、詩には女性としての固有の表現や主張が見られるのか、またそのような詩は交流のあった士大夫の詩作にどのような影響を与えたのか、このような点について彼女達が詠出している詩と詩作から考察することによって、唐代女性詩人の詩の特質と詩作の文学的な意義について論述している。

論文は三部、五章という構成である。第一部は「宮女の詩作」、第二部は「妓女、女道士の詩作」、第三部は「新たな恋情の詩」を主題としている。第一部では初唐の上官昭容、第二部では盛唐末から中唐の初めの李冶、中唐の薛濤、晩唐の魚玄機、と初唐から晩唐までの各時代の女性詩人を時系列に沿ってその詩と詩作について論じたうえで、第三部では、李冶、薛濤、魚玄機の三人の詩人の詩に用いられている「相思」の語から、新たな恋情の詩について論述している。そして、四人の詩人が詩を詠むことによって唐代において遺した足跡をそれぞれ点にして、それらの点を繋げることによって見えてくる事柄から結論を導いている。

唐代女性詩人の最大の特徴は、中唐以降に妓女や女道士の詩人が現れて、多くの詩を遺しているということである。上官昭容は三十二首、李冶は十八首、薛濤は八十九首、魚玄機は四十九首と多い。『全唐詩』によると、唐代の女性詩人としては約百二十人が確認されるが、作品数は一首か二首がほとんどで、詩数が二桁となる詩人は少ない。漢代から唐代に至るまでの時代においても、鮑令暉、沈滿願、劉令嫻といった女性詩人も輩出したが、唐代の女性詩人の数にはとうてい及ばない。

唐代の妓女や女道士は何を契機に詩を詠み始めたのであろうか。女性詩人達の詩作をみると、妓女は宴席等で、女道士は道観等で士大夫との出会いによって詩を詠み始めたことが窺える。唐代においては道教信仰が盛んになって道観が多く存在し、女道士の道観も少なくなかった。士大夫はその女道士の道観に入りして、女道士と交遊して詩を詠んだとみられる。また、唐代社会が繁栄を極めて妓館等での宴遊が一般的になることによって、士大夫と妓女の出会いも多くなる。更に唐代には、隋代に始まり、唐初から詩賦が試験科目に加えられた科举制度が浸透していき、詩的才能に対する社会的評価が高まるにしたがって、詩を理解し自らも詩が詠める妓女や女道士と士大夫が、詩を詠むことによって身近な存在となっていた。そして、妓女は宴席等で女道士は道観等で、士大夫が詠んだ詩の聞き手、つまり受容者となり、や

がて自らも詩の詠み手、つまり創作者となっていったと考えられる。

また、詩を詠むという行為は過去の作品に倣うことによって行われるというが、妓女や女道士が詠出している詩からは、士大夫の詩の語彙や修辞に倣って詠っている形跡が窺えるものがある。このように妓女や女道士は宴席や道観で士大夫の傍らにることによって、詩を習い倣っていったと考えられる。そして女性詩人達は、士大夫に詩の詠い方を習い倣って詩作を重ねるうちに、やがて女性固有の新たな作品を生み出すようになる。このようにして女性詩人達は文学という営みに近づいていったのではないだろうか。

また、妓女や女道士と士大夫は、詩を詠む機会を得て身近な存在となり、お互いの詩を理解して詩の世界を共有するようになる。そうした詩を介しての双方の心理的な交流が活発になって、時には恋愛感情も生まれて、妓女や女道士はその思いを詩に詠ったとみられる。士大夫は恋情を詠うことは伝統的な儒家的文学観に背馳すると考えて、自らの恋情を自らの思いとして詠うことはなかった。そのような恋情の詩を唐代の妓女や女道士は詠い始めたのである。妓女や女道士は儒家的文学観とは無縁の存在であったことから、詠うことができたのであろう。妓女や女道士は、一部の特権階級の女性以外は詠うことがなかった詩を詠い始めた、それも士大夫が敬遠していた恋の詩を詠い始めたのである。そして、そのような恋情の詩はやがて妓女や女道士と交遊のあった士大夫によっても詠われるようになっていく。

女性詩人達は詩を詠むことによって唐代文学にそれぞれ足跡を遺しているが、最も大きな足跡は自らの恋情を自らの思いとして詠うという、今に続く恋情の詩を詠い始めたことだろう。中唐以降には、このように女性詩人が詩作を重ねて成長して、文学の受容者となり、そして創作者となって重要な存在となっていったとみられる、ということの一つの結論として示している。